

< 資料紹介 >

長田穂波日記1936年(1)¹⁾ 療養所のなかの生の痕跡

阿 部 安 成

I . オサダ・ホナミ

ここに紹介する資料は、長田穂波の日記である。穂波は1909年5月中旬に、開所してまもない、瀬戸内海の大島にある第四区療養所にやってきた。1945年12月18日に亡くなるまでに、彼はただいちどだけ島を出たことがあった²⁾。大島で穂波は、14冊の詩集などをのこした(没後に遺稿集1冊)。

わたしが初めて香川県庵治郡(当時)の大島を訪れたのは、2004年3月24日から26日のことだった。泊まったホテルまでタクシーに乗り、大島ゆき桟橋へ、とゆき先を告げたところ、東京の大島ですか?との返答におどろいた。わたしがゆこうとしている島は、地元のタクシー運転手も知らない場所だった。だが、桟橋にゆけばすぐに大島ゆきの船着場はわかる。タクシーで乗りつけるひとは少ないということか。このときから大島へゆくにはいつも、高松港発第1便の9:



写真1 瀬戸内海地図

1) 本稿は2002 2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「ハンセン病者についての歴史社会学研究」の成果の一部である。青松園での調査にさいして入園者自治会の方々、またとりわけ霊交会代表の方々にはたいへんお世話になった。長田穂波の日記は霊交会代表の許可を得て、『彦根論叢』誌上で公開することとした。ここに感謝を記すとともに、長田穂波日記の翻刻が遅くなってしまったことのお詫びをもうしあげる。

2) 野島泰治「序」(長田穂波『穂波実相』日曜世界社、1938年)。

10発「せいしょう」に乗ることとなった。高松港を出て、屋島を右にみながら瀬戸内海を船はすすむ。20分くらいで船は大島の桟橋に着く。大島はその名とちがって、ちいさく細長い島だった。

最初の調査では入園者自治会の許可を得て、『青松』編集部が保管する『藻汐草』(逐次刊行物)の撮影をおこなった。その後、翌2005年2月3日と4日の



写真2 霊交会教会堂

調査では入園者の著作の調査と撮影をおこない、このとき長田穂波とその作品を知り、穂波がその運営にかかわったキリスト者の集まりである霊交会の蔵書も閲覧した。2007年には3月26日から28日まで、おもに霊交会での調査と撮影をおこない、この3回めの訪島のときに、霊交会の教会堂にある本棚

のなかに、穂波の日記をみつけた。霊交会教会堂の執務室には、硝子戸のついた大きな書棚があり³⁾、そこにはとりたてて分類されていない数千冊の書籍がならんでいる。キリスト教関係の図書が多いそのなかに、表紙に「Diary/1936」と記された穂波の日記があった。2005年の訪島時にしっかりと探してはみたが、それはみつからなかったし、2007年にはさらにみつけるのではと念入りに図書を手にとってみたが、ダイアリはこの1冊だけだった。

日記帳は滋賀県蒲生郡八幡町にある近江セールズが発行した、メンソレータム本舗編輯日記である。少し大きめの手帳といったサイズなので、一日分の欄にそう多くの文字を書けるわけではない。長田穂波「随筆松籟海鼓」(8)(M5 5 3605)に記されているところでは、「古い手帖より発見した作品を其儘に記して見て、彼の日の記憶がマザマザと甦つて来て嬉しいのである」というので、これは穂波が思いついた俳句を書きとめたり、こころに浮かんだことがらを記

3)『藻汐草』第5巻第4号(大島療養所患者慰安会代表者野島泰治、1936年4月。以下M5 4 3604と略記する)の口絵写真にある「図書閲覧室」の書棚が現在霊交会執務室にあるそれに似ている。

したりする日々の備忘録くらいに用いられていたのかもしれない。

穂波のいた療養所は、1910年に大島療養所と改名し、1941年に国立療養所大島青松園となる。穂波の著作は、大島青松園入園者自治会がワードプロセッサで作成した「入所者刊行図書目録」(B4判3枚⁴⁾)によると15点ある。刊行順にあげると、以下のとおりとなる(*は大島青松園内にはない作品につけた。Webcat Plusなどで判明する所蔵機関を記した。NDLは国立国会図書館。大島は大島青松園文化会館)。

『詩集 霊魂は羽ばたく』光友社、1928年(恵泉女学園大学図書館、NDL、西南学院大学図書館、高松宮記念ハンセン病資料館(現国立ハンセン病資料館)、奈良県立図書館情報館、奈良女子大学附属図書館、プール学院大学図書館、立教大学図書館、霊交会)

同前、日曜世界社、1940年* (NDL、昭和女子大学図書館)

同前、ろばのみみ編集部、1975年* (1940年版の復刻)(埼玉大学図書館、梅光学院大学図書館、平安女学院大学情報メディアセンター)

『みそらの花』光友社、1928年(大阪大学附属図書館、大島、香川県立図書館、NDL、西南学院大学図書館、同志社大学総合情報センター、奈良教育大学附属図書館)

『詩集 霊火は燃ゆる』光友社、1930年* (長島愛生園神谷書庫)

『光れ輝け』修養団、1931年(大島、霊交会)

『詩集 祈りの泉』修養団高知県联合会、1931年*

『自伝 小さき者』霊光会、1931年*

『回春の太陽』培文堂森書店、1933年(大島、西南学院大学図書館)

『詩集 雲なき空』一粒社、1935年(大島、NDL、西南学院大学図書館)

『修養談 砕けて結べ』1935年*

『穂波実相』日曜世界社、1938年* (NDL、高松宮記念ハンセン病資料館、同志社大学総合情報センター、長島愛生園神谷書庫)

『詩集 もゆる心』1938年*

『神は活く』1939年*

『病床その日その日』ともしび社、1941年(大島、長島愛生園神谷書庫)

4) これは『閉ざされた島の昭和史 - 国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』(大島青松園入園者自治会(協和会)、1981年)所収の「入園者刊行図書目録」と一致する。

『聖書研究 創世より瞑想』1943年*

『福音と歓喜(遺稿選集第一巻)』聖約社, 1950年(高松宮記念ハンセン病資料館, 霊交会)

穂波はこのように数多くの作品を世に出し, また霊交会の会報『霊交』の現在残るすべての号に随筆や詩などを寄せている。だがそれらの作品は, ごくかぎられたところでしか閲覧できないし, 穂波の作品をまとめてみられる場所もない⁵⁾。その作品すべての所在もわかっていない。『霊交』は, 大島青松園霊交会と長島愛生園神谷書庫にその一部が残っているにすぎない。穂波については研究のうえでの言及もほとんどない⁶⁾。また, ハンセン病の療養所内で記された入園者の日記も, ごくわずかししか公開されていない⁷⁾。穂波の作品を考えるうえでも, そしてハンセン病療養所における生の軌跡を明らかにするためにも, ここに穂波の日記を翻刻することとした。

穂波は『霊交』(第231号, 1938年2月10日⁸⁾)の「編輯後記」で「編輯子の姓名」^(ママ), つまり穂波の姓名の読み方について示している。

おさだほなみ

長田穂波 / 斯く読むのが本当であります, 何卒御加禱下さいませ / 姓名の序にお話さし

- 5) 穂波の詩は, 大岡信責任編集『ハンセン病文学全集』第6巻詩一(皓星社, 2003年)に『靈魂は羽ばたく』から12編の詩が収録されている。なお同書では『靈魂を羽ばたく』を1940年に日曜世界社刊行としているが, この元版が1928年光友社刊であることが記されていない。また同書は「著者紹介」において長田穂波をな行に入れている(つまり「ながた」としている)。その紹介には上記15冊に入っていない「宗教書『伸びゆくもの』(一九三三)」^(ママ)がみえる。また『創世より瞑想』は「現物は確認できていない」という。ここには『光り輝け』との誤記もみえる。
- 6) Web でみられる PDF 版論文, 今滝憲雄「日本における無教会と社会正義 井藤道子の実践を中心に」(『アジア・キリスト教・多元性』現代キリスト教思想研究会, 第3号, 2005年3月)で, ハンセン病療養所の看護婦だった井藤の「生き方を検証する」なかでわずかにふれられるていど, また馬場純二「医官, 内田守と文芸活動」(『歴史評論』第656号, 2004年12月)でも穂波を一事例としてとりあげたくらいである。草林潤之助「隠れたる世界的詩人長田穂波の伝記 大島青松園に生涯を過ごせる」(『讃岐公論』讃岐公論社, 第41巻第2号, 1971年2月~第41巻第8号, 1971年8月)があるが, この伝記はなにを典拠としたのかまったくわからない(連載第7回をもって説明のないままに中断となる。執筆者の草林はその後同誌(第41巻第10号, 1971年10月)に「名工波乱の一生名工左甚五郎の伝記小説」を寄稿している)。
- 7) たとえば鶴見俊輔責任編集『ハンセン病文学全集』第4巻記録・随筆(皓星社, 2003年)には明石海人と北条民雄の日記が収録されているだけ。
- 8) 以下, 『霊交』を典拠として示すときは, R231_380210, と略記する。

て頂きますが、名礼は通じさえすれば本尊こそ大切と存じ、大島でも『おさだ』と呼ぶ人はありません。ナガタよ、と通つて居る訳であります。／ 穂波、これは『スイハ』と読んでみました処、その読名では国語上より高貴の前や、目上の前に失礼になる事があると知りましたので国語の如く『ほなみ』と改めました、此方は直にホナミと呼びなされました。／ 人間は間違た事でも習慣となると感情や意識までも其方へ曲るものと見えて『おさだほなみ』と呼ばれると一寸変な気持がする。間違た習慣か本当を曲げてゐる、斯る事は尠くない事でしょう！

現在、Webcat Plus では、「著者読み推定」あるいは「著者読み不確定」といった留保がつけられたりつけられなかったりしながら、「ナガタホナミ」と表示されている（『詩集 雲なき空』のみオサダホナミ）。「東讃孤島の病室」から「天父の栄光を頌讃する絶叫」としてあらわした穂波最初の著作である『詩集 靈魂は羽ばたく』に寄せられた賀川豊彦と与謝野晶子の序では、すべて「長田^{ながた}」とルビがふられている。ここにまず、彼の姓名の読み方は、おさだ・ほなみ、と確定しておこう。穂波については、つぎの記録がある。

青年の名前を長田嘉吉と言ひ十八歳だつた。彼は開所と同時に徳島県から来たが、今迄の部屋が不自由室に変更され、同居者はそれぞれ他室へ移転したのだ。／長田は三宅〔官之治。筆名に清泉 引用者による。以下同〕とちがつた干性癩だつた。眉毛はあり、顔は普通人と何ら変らなかつたが、手足は萎えて指がなく、余程不自由さうだつた。きかん気のやんちゃ者で、右腕に「一心」と刺青までして人目を惹いた。

こう記す土谷勉の『癩院創世』（木村武彦、1949年。大島青松園図書室所蔵）は、穂波が執筆した未公開の原稿「永生の輝き」（「福音の証者三宅清泉」との副題）をもとにして、土屋が穂波とエリクソン宣教師について加筆して成った大島青松園における伝道の史書となつた（同書「あとがき」）。三宅もエリクソンもともに穂波の師とってよい人物である⁹⁾。ここにみえる穂波の不自由さについては、それへの留意が指示されたこともある。

穂波の著書である『光れ輝け』（1931年）の扉口絵写真には、穂波自筆の「はしがき」原稿が用いられている。その説明にいう、「図は本書の著者自序原稿

9) 現在霊交会執務室には三宅とエリクソン夫妻の肖像写真が掲げられ、教会堂まえには「祈の人三宅清泉之碑」（1943年3月11日建立）と「エリクソン博士夫妻之碑」（1949年クリスマス建立）が立っている。

の一節で、ペンを手先にくゝりつけて頤で支へ、苦心惨憺して執筆したる自筆です。／この文章中に認められたる『不自由な手にペンを紐で結びつけ云々』の文字に意を留めて御覧ねがひます」との指示である。穂波自身は「苦心惨憺」といった大仰さとはいづらく無縁なところで、このみずからの書くという動作を記録している。『光れ輝け』のなかに、「顔のコブ？」という一節がある¹⁰⁾。

自分の肉体は大部分が菌害を受けて、自分ながらヤツカイな存在である。／^{かみのけ}頭毛は脱落するし、顔面は引き曲つて、表情が怒つた馬鹿の如くに固定して、優しい顔は現れない。笑へば声の変調にとゞまり、泣けば閉ぢられない目より涙が流れ下るのみである。両手は指が二三屈曲して居り、他は掌近くより切断されてゐる。胴体には斑紋が地図の如くに現れ、足は右は足首より切断してあり、左足はクルブシ弱くて投げ歩くのである。／昼も夜も神経痛が起りつゞけ、左足の裏の傷は幾年もの間を痛みて最早や全治する気配はない。発熱に次ぐ発熱である。／写真を映すのと鏡を覗る事は、耐え難いことの一つで、二十年近くも夫等を遠ざけて居たのだが、此間は鏡を久し振りに覗いて見た。／右の頬の真中に一個のかたいコブが出来て其上に黒くて荒い毛が生えて其毛髪的大部分が摺り切れて居る。／『……ハテ不思議なこぶ……』／然しそれは解釈が出来ました、コブの原因が……それは右手に紐で結びつけたペンを更に右の頬に押しつけて書くので『さう^し為ないとペスがキマらない故である』何時となく出来たコブで、其の上の黒き毛髪も定めし幾回となく摺り切られた事であらうと思はれた。／自分はコブの上を撫しつゞも、／『有難いことだ……』／自分は我が肉体にお礼が言ひ度い心地が胸一杯に突き上げて来るのであつた。／『靈魂は羽ばたく』を生みしコブだ。／『みそらの花』もこのコブと関係がある。／『靈火は燃ゆる』も同じことだ。／その他に毎月の『靈交』と、時々ながらも各地の雑誌より求めらるゝ原稿と、毎日の諸方へ送る手紙との跡である。／自分は大事に二ヶ年は保存する、受け取つた手紙のことを思ひ浮べた。／救はれた数々の喜びの訪づれが沢山ある。神への感謝が充ちて居る。／オーこぶよ！／自分はお前の意外なる奉仕に敬意を払ふよ……それで良く働いたね……やはり社会に用があつたのだ、決してスタレモノでなかつたのだ……。／そして、この肉体でこの働き……壮健者の肉体は何と尊い存在であらうと思はれた。

ペンを握れない手は、穂波の最初の著作となった『詩集 靈魂は羽ばたく』にも、その序として「ペンを右手に紐で括り付けて」と賀川豊彦が記していたとおり、穂波にとっては初めからのことだった。

10) これはのちに『穂波実相』(日曜世界社、1938年)にも収録される。

手足の不自由さにくわえて、穂波には自分の「脳」のぐあいも気になっていた。「ほなみが見えんので御心配下さる方もありますが、ほなみは脳のためツマラン面相して居ります、然し昨今は紙一枚位よいかと存じます、秋風でも立ちましたら、又独特の大論説をだらだと記すであります」(R106 270801)、「脳を病む故、原稿が思ふ様に記せません。御辛抱して頂き度う御座います、会員は健在で御座います、皆様の御清福を祈つて擱筆致します」(R238 380910)と「編輯後記」に書いたとおりである。彼はこうした不具合や苦痛を、どこか自己の身体の外に追いやっているように見える。

他方で、さきの名の読み方の披露につづけて、

いま一つ自分の広告をいたします。御訪問下さる方の多くが『自愛して長生せよ』と仰せらるる御親愛にホロリと致します。何分肉体がヘンテコになつて終つて、定めし一見して倒れさうに御感じにならるるのであらふと思ひます。/ 我れながら崩れ行く肉体には愛憎が尽る程です、追々と動き難くなつて来ます、然し内なるものは反比例的に益々若く勇んで来る、其処で心と口とが手足の動きと釣合なくなつてジレットタイ限りであります。(R231 380210)

と書いたように、その「崩れ行く肉体」にところが倦んでしまうこともあった。

ところで、ハンセン病者の創作作品は、どのように知られてきたのだろうか。北条民雄や明石海人、島田尺草はその全集が刊行されたり、あるいは文学全集の1巻にその作品が収録されたりしてきた¹¹⁾。それに照らすと、穂波の作品

11) 川端康成編『北条民雄全集』全2巻は、1938年東京創元社刊、同年創元社刊、1939年創元社普及版刊、川端康成・川端香男里編『定本北条民雄全集』全2巻は、1980年東京創元社刊、1996年東京創元社創元ライブラリ版刊がある。明石は、『海人遺稿』(改造社、1939年)、『明石海人全集』全2巻(改造社、1941年)、内田守人編『明石海人全歌集』短歌新聞選書(短歌新聞社、1978年)、村松武司ほか編『海人全集』全3巻(皓星社、1993年)、『海人遺稿』盲人たちの自叙伝26(大空社、1998年復刻版)がある。島田尺草の全集は、内田守人編『島田尺草全集』(長崎書店、1939年)がある。文学全集への収録は、海人は藤田明責任編集『和歌山』ふるさと文学館第36巻(ぎょうせい、1995年)に「海」が収録、島田はなく、北条は『新日本文学全集』第4巻(牧野信一、梶井基次郎、嘉村磯多、北条、改造社、1942年)、『現代文学代表作全集』第4巻(万里閣、1948年~)、『現代日本文学全集』第79巻(十一谷義三郎、田畑修一郎、北条、中島敦、筑摩書房、1956年)、同第63巻(同、筑摩書房愛蔵版、1961年)、『日本現代文学全集』第74巻(牧野、嘉村、講談社、1967年)、『現代日本文学全集』第63巻(1967年、筑摩書房1956年版に同じ)、『日本短篇文学全集』第35巻(十一谷、梶井、北条、島尾敏雄、筑摩書房、1969年)、『現代日本文学全集』第63巻(筑摩書房増補決定版、1973年、1956年版に同じ)、『近代日本キリスト教文』

は単行本として出されたにとどまっている。さきに記したとおり『詩集 靈魂は羽ばたく』には、賀川豊彦や与謝野晶子が序を寄せたが、穂波はいまでは、知られているぐあいは北条民雄にはまるでおよばない。その穂波自身が北条や明石の名をあげた文章がある。『靈交』(259 A00610)の「編輯後記」(署名なし)、

友岡円諦さんの「真理」誌¹²⁾に東京の北条、九州の尺草、長島の明石、それに穂波を加えて、日本癪者の四天王と数へてあるとの噂を承りました。/ その三天王は既に逝去して舞台に残つたのは自分一人誠に淋しく思ひます。癪者は勉強し修養してやゝ円熟して来ると倒されます、悲しい事であり、また立派な教養ある人格者も多く居られますが、一身上の都合で黙して表面に出られません。四天王が癪者の偉い方面の代表では決してありません。

である。穂波の感慨は、4名の代表のひとりとして選ばれたことへの喜びとはちがう。こうした穂波という生を江湖に報せ、穂波を、そしてハンセン病療養所に暮らしたひとびとの生を問う構えを示す試みを、これから数回にわけて、彼の日記の翻刻とともに述べてゆくとしよう。

(凡例) 日記原文には、文章のあいだの行に区切りをあらわす「×」の記号が

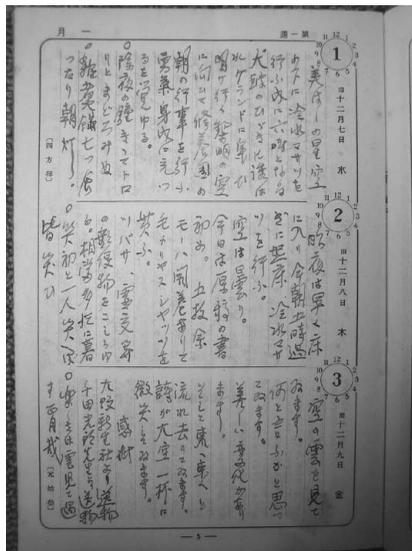


写真3 長田穂波日記

12) 学全集』第9巻(芹沢光治良, 太宰治, 小山清, 坂口安吾, 北条, 教文館, 1975年), 『日本短篇文学選』乙西文庫206(夏目漱石, 国木田独步, 岩野泡鳴, 小栗風葉, 有島武郎, 芥川龍之介, 泉鏡花, 北条, 横光利一, ソウル, 乙西文化社, 1976年), 『日本現代文学全集』第74巻(牧野, 嘉村, 北条, 講談社増補改訂版, 1980年), 徳島の小説編集委員会編『徳島の小説 - 郷土出身作家選集』(徳島市立図書館, 1984年), 『闇×幻想 [13] = 黎明 - 幻想 - 怪奇名作選』(芥川龍之介, 江戸川乱歩, 北条, 夢野久作, 夏目漱石など, ペンギンカンパニー, 1993年), 『存在の探求』上巻・全集現代文学の発見第7巻(梶井基次郎, 北条など, 学芸書林, 2003年)となる。

12) 友松円諦と『真理』については、坂本慎一「戦前における友松円諦の真理運動」(『叢書 松下幸之助』PHP 総合研究所第一研究本部, 第5号, 2006年4月)がある。

記されているが、それは省略した。『 』, . . . , , 下波線といった記号や、現在は人権の観点から使用しない語句も原文のままとした。「 / 」は改行をあらわす。適宜、カンマをつけた。「週末余白」は日記帳に印刷されていた欄である。

1月1日(水) 美はしの星空の下に、冷水マサツを行ふ内に六時となる、大鼓のひゞきに誘はれグランドに集ひ、明け行く黎明の空に向ひて修養団の朝の行事を行ふ、勇氣身内に充つるを覚ゆる¹³⁾。 / 除夜の鐘きゝてトロリとまどろみぬ / 雑煮餅七つ食つたり朝灯り。

1月2日(木) 昨夜は早く床に入り、今朝五時過ぎに起床、冷水マサツを行ふ。 / 空は曇り。 / 今日原稿の書初め。五枚余 / モー八開巻ありて毛メリヤスシャツを貰ふ¹⁴⁾。 / ツバサ、霊交等の郵便物をこしらゆる。相当多忙に暮 / 笑初と一人笑へば皆笑ひ

1月3日(金) 空の雲を見てみます。 / 何と言ふかと思つてみます。 / 美しい変化があります。 / そして東へ東へと流れ去りてみます。 / 詩が大空一杯に微笑してみます。 / 感謝 / 大阪新生社より送物 / 千田光郎先生より送物 / 楽しさは雲見て過す正月哉

1月4日(土) 何か朝一寸とした事にかゝつてみると半日は済む、半日済むと其日は半端で他の用は出来ないものだ。 / スタートは矢張朝である。大切な用から初めて、何時でもよい事は午後に廻すに限る。 / 今日報知大島誌の懸賞問題でツブした。 / 道草を喰つて (判読不可) 日くれにけり〔≡は以下同〕。

週末余白 うかうかとしては居られず七五三をろし / 朝早く祈り心に起床して。 / 六時半には冷水マサツを終り。 / 毎日年賀の返礼の準備やら相当の時間は働きつゝけた。 / 身体は鼻血が毎日ヌケル他には筋切れ(手指二ヶ所)ある限りなり。 / 原稿は五枚記したのみ。 / 正月気分あり。

1月5日(日) 午前原稿を書く、十枚。 / 暮方の空に多くの鶯が舞ふ。

13)「隨筆 松籟海鼓」(6)(M5 2,3602)に「附記=六時の空は深々と未だ星を宿して澄み切て居る。修養団支部の朝の行事の太鼓が勇ましく曉きを告ぐると。明け行く東雲の色彩をゆり上げゆり上げて、万歳の歓声はひゞき渡るのであつた」とみえる。

14)「モー八」とは『藻汐草』の「感謝欄」にときどき出てくる慰問品を送ってくる高松の「モーア先生」か。

／思ひ起す二十五年以前の島は、毎夕鳶と鴉が、斯く舞ひて北と南の山にと歸つたものであつた。自分はソレを無心に見入たものである！／ 鳶の舞ふ浜辺は白し冬の海。

1月6日(月) 原稿七枚。／冬枯れの庭に菊花が真紅に一株だけ見頃に三輪の花をつけて居るのが目立つ、其上に雪が降りかゝる。／私は何か大なる声が届くやうに思はれてならぬ。／前庭に寒菊一株かほりあり。

1月7日(火) 原稿五枚／婦人宣教師が訪問して下さつた、何と言つても偉いと思ふ。我らも彼の信仰の努力を学びたいと思ふ。(ウーセ・タロ)思想的の変転によれる受難と、生活様式の相異より来る不自由と、人種的な感情とに勝ちて行く強さよ。／子狗らは戯れて居り雪の庭。

1月8日(水) 藻汐へ五枚／神と語つて居ると詩想は棚晒となつて白けて終ふ¹⁵⁾。／高本君に藻汐へ書いて呉れるかと誘はれて、さて！所の唯一の誌面、兎に角、なるか、ならぬか、書いて見やうと決心。稿中端に河野君の義足を修繕しなど、然り書き終へた。

1月9日(木) 神は私が私を知り、要求する処に越して、私を知り、私のために要求して下さい。／神の前に希求しても、人の前に希求しない生活に、全く入るべきである。／斯んな事を手紙で書き送る／初空のひろきを今朝の我が心

1月10日(金) 靈交編輯、十二枚記す／向上会に出席する、早く足傷を治して頂きたい、何としても今一步活躍せぬと気分が出て来ない。／山は大雪との噂、朝の冷水マサツが一寸とこたへる。／朝の灯にチラチラふれる小雪哉

1月11日(土) (岡山田中先生より贈物)／原稿十枚／灰火をいわして居ると山の匂ひがするやうに思はれて、何となくなつかしい心となつて。中仙道や木曾路やあゝした深山の谷に煙る灰焼く煙が匂ふて来る。坂道と山腹の家むらとが見えて来る。瞑想に入つてみた／冬山の白きに落ちぬ夕陽いま／今日、丸山鶴吉先生御来島¹⁶⁾。

15) 前掲「隨筆 松籟海鼓(6)」には「他の原稿に追はれて詩想は棚晒しである。今日は藻汐草のメ限日ですよと言はれて、ヤレソレと清記のペンを執つた。斯ふした即今で平氣に応募なし得る、これは老練したのか老獪になつたのか」とみえる。

週末余白

1月12日(日) 福本さん入院す。/編輯終,十枚/寒む空にも守られて,先ず靈交二月号の準備は出来た,神よ強くひゞかしめ給へ!/たゞ拙劣なるこの心よりの献物を活かし用ひ給へ。/ 祈りつゝ寒さの朝をわれは行く

1月13日(月) あかし人へ,五枚/有難い事に新年早々に飯野先生より,自給伝道十五年,献堂十三年,愛の家一週年に対する祝辞と感想を求められた。私は光栄として起原稿した/『要は福音に生きし人』『キリストにニへる人』/ この道の雪に挫ひて句のあんぎや

1月14日(火) 今日読書す/キング一月号を見て内田鉄相の修養団を聞く,非常に教へらるゝ処あり/第一 スタート/第二 損を見積/第三 丸く小さく/第四 明朗に行/等々を訓ふ。/ こもの中のぞけは寒の牡丹かな

1月15日(水) 今日読書す/火鉢の炭火が灰の中で,うは白みつゝたつて行く如くに,大島の日も何の変化もなく,黙々と過ぎて行つた。/ 黙々と火鉢に老へりオシツンポ。/ 厳寒の空に無声の叫びあり。

1月16日(木) 黙示録研究。/中々に寒むい,窓外の松の梢に夫婦雀が先刻から丸くなつて,何か相談するやうに鳴き交してゐる/淡白い雲がスウスウと大窓を流れて行く,朝捨し水が氷つてゐる,其庭へ木葉のやうに雀がをりて来た。そして私は神を想ひ居る/ 雀らの上に雲行く冬の午後

1月17日(金) 黙示録研究/零下八度,戸外の極寒を感じ,火を注視し時々茶を出して想ふ。『キリストの顔相』何故に弟子はこれを伝へなんだであらふ,黙示録には一種のタトエによりて現されて居るのみ。/ をもひ出す母若かりし冬籠

1月18日(土) 黙示録研究/夕方より雲出て牡丹雪降りそゞぐ,氷点下六度なり/昨日からの厳寒にて今朝は冷水マサツ休む,余り寒むくては肌によくなき故/庭の植物一夜の間にグツタリとなえ,一日寥然たり。/ 雪の下ばかり美し昨日今日

16) 貴族院議員, 視察のために来訪(M5 2,3602)。この訪島への謝辞がある(川染義信「感謝」M5 4,3604)

週末余白 この週間は誠に平凡な内に恵まれて居る。それは瞑想『ニ新力』である。黙示録の研究も面白く進行して居る。ノ外よりも内への準備でいそがしいノ足傷は遅々として未だなり。

1月19日(日) 集会に出席ノ思つたよりも寒むい日であつた。久し振りに礼拝堂へ行くことをバゆるされたが。四方の景は冬晒れの淋しいものであつた。ノ集会は可成に充霊であるが、未だ熱が不足してゐる！ノ火の気なき礼拝堂や日曜日

1月20日(月) 読書、研究ノ新聞を四週も読む。ノ軍縮会議は兎に角も駄目である事は明白となつた。ノ地球の悩みは、予言の如くに進行して行きつゝある。東の島より昇る福音とは何ぞ！ノ寒風に枯たる野山ゆれて居り。

1月21日(火) 高田姉より送物ありノ黙示録研究ノ足の傷が寒さの為に全治が遅々としている。ノ神が癒して下さる事を信じてゐるノ正月に入りて早や三名死亡した、私は此頃特に身体の都合がよい。食事が甘い、感激！ノ我れ一人神に残りて小春かな

1月22日(水) 黙示研究終ノ西の風が強くアンテナがひどくゆれてゐる。ノ空は蒼い、腹が太いので、心地が悪いやうである。ノ二十二号の河村君の一周忌とてゼンザイを二度も呉れるノ冬の海SOSへの救助船

1月23日(木) ラヂオ修繕ノ今日は旧の大三十日とて定めし讃岐地方は人心キンチヨして東西狂奔してゐる事でありやう。ノ母と二人カリもなくカシもなく、つゝましく正月を迎えし事が、昨日のことの如く偲ばれる。窓外雲ひくく東に流れてゐるノ新年の祝辞ばかりや初手紙

1月24日(金) 原稿五枚。ノ頼まれて万歳を作る、中々ムツカシイ、一寸の気のぬけた処で、次の大切な立場に立つのは恵であるノ橘兄よりオーバをドテラを其他を頂く、オーバは兼て望まれて居た兄にユズルノ新しき人のやうなり衣更へ

1月25日(土) 原稿四枚ノ雨の音を聞きつゝ心静かにもの書く事は嬉しいものである。ノ然し現在の自分の心境は物不足な感が深い。ノ是は心に燃ゆるものを押へられて居るからである、早くゆるされ度いノ讃岐路は旧正月や奴

凧

週末余白 日曜問題 / 安息日は土曜であるとは聖書的である事は明である。
 / 然し日曜は主の復活とその救ひに新しく活かさるゝ、我らに取りて聖日と為
 べき意味がある。 / 特に主は我は安息日にも主たるなり、とて・・・又この
 日は冥府にて大贖ひをなさつた、此処にも意味はある。 / 昨日今日たゞ神の
 みに活かされむ

1月26日(日) 訪問学生あり / 集会へ出席 / 火のバプテスマの題下に思ひ
 切つて叫ぶ / 小為替の期限超過は手数料五銭を貼附して差し出す事となる。 /
 幾重にも雲重りて冬空の光景物凄かりしか、小雪となりぬ / 教会の庭しんし
 んと小雪降る

1月27日(月) 特別委員会 / 足傷思はしくなし / 大気も現在はオチツイて
 来てゐる、厳寒の^{ママ}せいか四人も早や葬つた。 / 原稿を記さうと思ひつゝ、イザ
 となると心が乗つて来ない、今日も暮れた。 / 村の事議す集会や小雪ふる

1月28日(火) 悔状記す / 二十二日午後八時半、太田楽山昇天すとの通知
 (鈴木信子) / 私は今日召さるゝとも善いか・・・瞑想すると・・・
 私は悔改めねばならぬ、更に靈的に精進せねばならぬと思ふ。 / みの入らぬ
 ミキはシナへぬ霜の朝。

1月29日(水) 差し止めらるゝ / 今日足傷に^(マ マ)を始めて用ひ
 る。 / うす曇りの窓に向ひて原稿を記さむと努力なしたれど、失敗に終れる。
 神、未だゆるし給はざるか! / 風無くてオダヤかなり、気温やゝ高きか? /
 葉牡丹の白きをめてる詩人かな

1月30日(木) 原稿九枚記す / 洗濯物が陽向の竿にかゝつたまゝ凍て附ひ
 て居る。室内に入取れると氷が解けてシツトリと濡れて来る。 / 西風弥々強く
 郵便船も来ぬらし。 / 北裏の氷ひねもす解けやらず。 / ハリ窓に雪吹きつ
 けて陽は斜め。

1月31日(金) 原稿十枚記す / 非常に寒い日である。 / 近藤氏より文学
 界を送られる。 / 癩文学を珍らしくも少し程読む。 / 何かスカスカした心持が
 すると思つたが、寒さの故とわかつた、早く炬燵に入る / とりとめも無き話

して炬燵人

2月1日(土) 休日/鯛が厳寒の為に浮ひて流れ来る・・・そして一貫目拾円也・・・大島にも二、三尾拾ふと言ふ、二十年振りの事なり¹⁷⁾。/『いのちの初夜』の比評を十枚余記す。/米沢さんに面談する。/

魚の浮く程の寒さや昨日今日

週末余白 週末に当りて深刻に繰り返して味ふのは。/『有難かつた』と言ふ想ひである。/癩者の生存は『未解結の人生』にあるとより考えられない人生が開結しつくしたるものならば、たゞに癩者のみでなく、活きられない人間が多いと思ふ。/最後の答案は神が持て居られる事を信ずる

2月2日(日) 集会感話す/『処女はらみて子を生まん』/海も山も冬は空の色か反映して淋しい気で一杯してゐる/癩病の精神を視るやうで、耐えられない/火が欲しい、春のやうな温い火が欲しい/サウ想ひつゝ礼拝堂へ登つて来つた/夜は特別委員会へ/歌心ストヴみつめ夜のふくる

2月3日(月) 読書/此処二夜、神経痛がした故が、気分がチグハグになつて仕事に心が乗^(ママ)て来ない/今にも雪がコボレさうな空模様であつて、膝がシンシンとしみるやうに寒むを感じる/幾分か熱気があるのかと思ふ。静かだ!! /灰色の空さむざむと松老し^{ふる}。

2月4日(火) 原稿五枚記す/『松籟海鼓』/大浜先生御訪問下さる/松尾良念兄逝く¹⁸⁾/穂波は療養所生活に対する方針をバ、清算改革すべき時が来たらしい。/地上何ものも頼むに不足/世を捨て見ればいとよし松の雪

2月5日(水) 読書/冬空は灰色に濁つて、終日寒むい気が一杯してゐる、アンテナがゆるくゆれて、雀が飛んでゆつた。/新築の槌音が馬鹿にヤカマしい^(ママ)ので、頭が悪くなる。/今日は一寸重苦しい気分であつた。/心なき人よ、

17) 長田穂波「隨筆 松籟海鼓」(7)(M5 4 3604)に「寒猛冷威は潮底に及びて魚界にも異変が生じたと見えて、昨今は大鯛小鯛が漂流する。その凍死体を拾つた話で持ちきり、渚を竿を手に右往左走する人も見受けられる。/大正四年?〔中略〕其年にも鯛その他の魚族が凍死して沢山漂着し、中には二貫四百目もある花鯛を拾つた者もあつた。/丁度二十年振りの厳寒」とある。

18) 追悼文がある(南畝居士「松尾良念居士を偲ぶ」M5 4 3604)

雪に小便の跡

2月6日(木) 読書 / 三宅老兄入院 / 霊交二月号の原稿が今日になりて印刷所に不着と判明、米沢さんの手中に未だ握られて居るのである。 / 第三種の出版法に反する定日発行遅延は、改願の手づきが入る / 困つたと言ひつゝ越しぬ年の坂

2月7日(金) 原稿三十三枚 / 二月号原稿ついに紛失して終つたと、誠に無責任な答へである。 / 大切な記事が悲しい哉、ワカラナクなつた、大困惑である。 / 昨夜、雪三センチ積り、朝、戸出の島美しかりし、この冬に入りて初めなり / 夕方、大浜先生と語る / ひつそりとして島庵に降る氷雨

2月8日(土) 民謡試作 / 小雨びしよびしよと寒さ肌にしみる / 俳句五句 / 短歌五首 / 研究会へ出す。 / 夜は長島愛生園の看護婦長さん達の童話慰問来演さる¹⁹⁾。 / 演芸や氷雨の庭へ灯のもるゝ。

週末余白 今週は不意の出来事、即ち霊交二月号原稿を役所に紛失して黙し居りし為めに大狼狽をなした。 / 且つてなき不快なる感を抱きつゝ、幾日も心寧し■■■■のである。事こゝに至れるは、上官の迫害行為として視る外はないと思ふ。 / 降る雪に増す美や山の木の姿

2月9日(日) 星を仰ぐ者と題して集会感想談 / 神に対する問題と言ふと、私の心は燃えて止まないし、且つ義憤をも感じるのを、いかんとも為し得ないのである。 / 神よ汝の公明なる審判を下し給へ。 / 唯一人雪の道ゆく小みの哉

2月10日(月) 向上会に出席 / 特にあたゝかき日なり / 療養所は一筋の綱である、三子の縄である、其上に皆が跳つてゐる。一子が張つても一子がタルンデはもたない、そこにイマワシキ問題が起るのである。 / 皆が汗と愛とにシツクリと結んで居らねばならん / 道化もの水にをちけり春の船

2月11日(火) 原稿十五枚記す / 今日の祭日も可成よき日和に恵まれた。

19) この慰問のようすの写真が口絵として、また観劇記として永見裕による「慰問童話劇」寸感、森彰「地蔵経の由来」を觀る」も『藻汐草』(5 4 3604)に掲載された。慰問には愛生園園長の光田健輔も来ていた。永見はのちに『癡人文学』(1937年)を刊行する。

日向きの窓下でペン執ると汗ばむ程であつた。／川口君風邪，ねる／今日も靈交誌来らざる模様なり／うらゝかな島の国旗や〔紀元節〕〔下線部は印刷文字〕

2月12日(水) 『私を見て下さい』／十八枚記し／大阪新生館宛投稿す。／靈交編輯初む，十枚記す／二月号は十五日迄延びると決定す／神よ我らを憐み護り給へ，アメン／面白う雲見る人や冬の海

2月13日(木) 靈交編輯終る，十五枚記／とにかく今日も張りつめて終日する／編輯室に座すると言ふ心持は実に有難いものである／書留郵便で送稿しやうと考えて居る／其方が方々へ迷惑をかけいで済むから！／メツキリと暖くなりと言ひ合へる

2月14日(金) ラヂオいじり／朝，原稿訂正した／どうも俺は小さくていかんぞ・・・・・・・・最少し大マカに心をバ持たねばならぬ!!／風あれど良日和，室の人は山へ遊びに出る，静かな昼／神仰ぐ目に大空の冬晴るゝ／^{〔ママ〕}茶山花に故郷の事の想はるゝ

2月15日(土) 手紙書き／靈交誌二月号来る。／室人大方風邪，中野兄ねる。／絶好の日和である。今日はラジオツンポとなる。／神よかんしやす／戦争の起る話や小六月

週末余白 感謝／今週も中々多忙に活して頂いた，有難い事である。／プランは立てぬ，自分の仕事は神の与へ給ふまゝであるから，神の^{〔ママ〕}プランを週末に知るのみ。／(一)エペリに伝道して／(二)人を漁る者とされ(三)神の業を励むべし／斯く示されてゐる

2月16日(日) 原稿十二枚，ツバサ誌のため^{〔ママ〕}／何かくと多忙であつた。郵便物八通作つた。／外はよい天気だが，今日は一寸と寒むいやうに感じる／神によつて示さる。汝人を漁るべし多く／重そうにエモノ提げ行く汐干狩

2月17日(月) 原稿三枚／沖縄宮古療養所甦生会へ／原支安兄訪問下さる／脳悪くして弥々メマイ気味なり／窓越しに訪問客と話し居り

2月18日(火) 靈交四月号編輯準備す／紛失してゐた原稿が出て来たので大喜びです／阿部ニさんより毛チヨツキ贈られた／宮内師其他御訪問下さる，

感謝 / 小春日にラヂオなほして居たりけり / ツバサ発行準備す

2月19日(水) 読書 / 今日は大変嬉しい日だ、足傷が全治したと言ふてもよくなつたのだ / 神よ感謝します / あなたに由るは勝利であります。 / 万歳来れるとのこと / 中野兄甚重症なり / 耳はれて物音遠し如月晴

2月20日(木) 休暇 / ケンピキで左耳大いに腫れ、発熱甚し、奥秋兄にアンマの愛をうけたり、感謝 / 明日より又大いに働かして頂くべし。 / 昨夕高松より少女来りて見えずとか / 迷子を呼ぶ声さむし二月の夜

2月21日(金) 原稿七枚 / 霊交四月号の編輯を終つた。明日書留で印刷所へ送る / 碧巖録と菜根譚とが参円で買へる・・・読み度いと思つて居た事として、明日注文する考 / ぶり返す風邪の気味や二月末

2月22日(土) 休養 / 今日は、菜根譚講話、碧巖録新講話注文する。 / 霊交四月号原稿を印刷所へ書留で送る / うす曇つて寒さ強し。 / うす曇る空に風なく雪の降る

週末余白 義憤がヤット治まつて心地よくなつた。 / 神への叛逆、これは自分の一番憎悪する事である。 / 『立腹すべき時に立腹したり』悔なし / 最近は伝道方面に導れつゝあり / 福音に熱あり冬の四ツ街路

2月23日(日) 礼拝の代りに原稿十八枚記す、『まあ聞いて下さい』、イエスの福音へ送る / 今日は神に捧ぐべき日ゆえ、伝道の為めに尽すことにして、大雪降りを耐えて記す / 田中先生より十冊寄贈なる。 / 牡丹雪降るほど消えてしまいけり

2月24日(月) 読書 / 甚だ教えらるゝ処が多かつた、兎に角も思想的信仰よりも聖書生活に入る事が本ものであると痛感した / 『あかし人』二部頂く、親交よし / 背戸に積む雪に血のあり鶉料理

2月25日(火) 原稿十二枚 / 米沢係長殿の招命にて分室へ出頭、エリクソン師の慰問を調査せよとの事 / 橘兄より菓子を送物あり、感謝して受く / イサ雪の野に火を抱いて馳せ入らむ

2月26日(水) 腹痛 / 終日降雪なり / 帝都に於て重臣七名ばかり殺害されしとの噂あり、人心驚がくす / 橘兄よりの送物、何とも致し方なし、心のむく

まゝに処す / 血に染むる帝都の雪の嶮かな

2月27日(木) 今日 は 休養 / 大阪の竹沢婦長様より「本間俊平」を送らる。
 / うす曇りの空は凶行の心の痛みを表したやうである。 / 国家の前途のため祈
るや切なり / 神によき我夢うれし雪の夜半

2月28日(金) 室員に誤楽のため『富士』を読まして貰ふ / いやにウス曇
つて小寒い日である、別に何もせずに本間俊平を読む、訓へらるゝ処、多大な
り。 / 足傷いよいよ全治、神様有難く御座ゐます。 / わけも無き話にはづむ
炬燵かな

2月29日(土) 原稿九枚 / 人心不安の内に日はくるゝ、一刻も早く帝都の
平安を祈るや切 / 本間俊平伝を読む。大いに教へらるゝ処、多大なり / 船を
出す日和風まつ如月かな

週末余白

3月1日(日) 聖集会 / SS 司会 / 足傷全治と見て出席したるも未だ悪し。
 / 今後は少しづゝ歩みつゝ癒す考えなり。 / 塚田先生より『赤い鳥二冊』寄贈
さる / 大君のために祈れとのり給ふ。

3月2日(月) 発熱気分 / 阿武さんと寺谷さんとにアンマをして頂く、感
謝。 / 昨日の室長会議に不参する。 / 空晴れて居れども小寒さ肌にしむ、今日
はスタンプ押して暮す。 / うそ寒の色の雲なり如月空

3月3日(火) 読書 / エリクソン師、宮内師訪問下さる / 足傷のために集
会に欠席す / 夜は腹が張りて睡眠なし得ず。 / 草の芽の其処此处まばら見え
初めぬ

3月4日(水) 読書 / 梶野先生訪問下さる、感謝 / 今日 は うす曇りて時々
小雪など散らす事がある。 / 昨夜より腹張りにて相当苦痛 / 『新生』三月号来
る。 / ちり塚も肥土と変りてケシの花

3月5日(木) 四ヶ月目に散髪 / 膝小僧を少しく傷めたと見ゆる。 / 六時
過ぎて大阪朝日の社会主事浜田氏来る。 / 明日は何かうどんでもあればよいと
て思ふ。 / ぶり返りぶり返したる余寒かな

3月6日(金) 読書。 / 今朝浜田先生御慰訪下さる。宮内先生と婦長さん

が御案内にて / 近頃毎日、心静かに読書する、誠によい事である。 / 父よ我が全部を占領して責任をもつて下さいませ、アメン / 寒桜やこの園ひろふ〔地久節〕〔下線部は印刷文字〕

3月7日(土) 祝賀会 / 室長会にも最後の欠席して、足傷全治祝賀会として『室員一同にうどん』を食べて貰った / 日和もよかつた、神よ感謝いたします。 / ぼんやりとした陽は正午水温む

週末余白 今週は原稿を記さなかつた。 / 然し、心の糧を吸収した事は甚だ多かつた / 聖旨であると信じて疑はない、多く出さしめんがために相異がない。 / 内ををさめ、内をみたま、これ無くて外に働き得ない

3月8日(日) SS 座談会 / みぞれ降りて甚だ冷寒波の震ふ日である、幸ひ足傷も癒えたので試行式を兼ねて拝堂へ登る。 / 植木新に加つて屋敷面目一新せり、崇高に成らむ事を望む。

3月9日(月) 原稿七枚 / 久し振りに仕事をした、ユ^(ママ)かイなり / 宮尾先生訪問下さる、感謝す / プロテスタント研究見本来る / もうぬくうなると言ふなり春彼岸 / 雪降りの軒に雀の鳴き交す

3月10日(火) 編輯(靈交) / 近頃のない温い日であつた。古原稿を出して訂正する。 / 何となく激しい伝導心が湧く、何かつきものをして来てらしい、聖霊の御働きであらふ / かすみけり山は遥かに海の果て

3月11日(水) 編輯終 / 足傷の一小部分が骨炎症にあるらしく見ゆ、何れ骨出せずは全治せざるべし。 / 五月号は特輯として天か? 地か? を以て埋む、八月号に又特輯せん事を祈る / なりふりもかまわぬ人や春掃除

3月12日(木) 原稿八枚記、『奴隷時代』 / 窓外には氷雨がシトシトと降りそゞぎて、肌寒むを覚ゆる。 / 学ばねばならぬこと多くある自分を知る。神よ学ぶべき書を与へ給へ / 療の庭松蒼々と柳の芽

3月13日(金) 原稿七枚、『永遠を得る』 / 小雨日和である、庭の金仙花が寒むさに耐えて一輪咲いてゐる / よし貧弱でも主より頂きし天につける生命の花を咲かしてゐたいと思ふ / 午後小説を読む / さむざむの小雨の庭や金仙花

3月14日(土) 原稿七枚、『処女マリアよ』/面白く仕事をした。働くと言ふことは有難い事である/室長会へ久し振りに出席する。重に規約改正問題に過ぎる。/夕方キング読む、これ又皆と喜びたり/小春日や病舎の人の庭あるき

週末余白 大分温くなつたし、兼て御示しを頂きしを使命と燃ゆるので、今週はドンドンと働き出した。/いやな出来事と思ひし原稿異変が神の聖旨の進行となりて、天か地かと使命行への道が早められた事、感謝である。/主よ更に用ひ給へ

3月15日(日) SSと集会/一時より室長会『候補辞退』の審議員を選び全任する。/審議員会を成立して、八時前に退席する。/何はとまれ二十四名の辞退とはウルサイことなり。/君ゆくな一寸と早いぞ花の山

3月16日(月) 原稿七枚、『妻と言ふもの』/今日より北へ行く事にする。/足傷は一骨とれずは全治なし難きを知る。/手紙を記し、且つ読書もする。フロツク甚だよろし、神はなくてはならぬ物を恵み給ふ。たゞ神の国と義を求めよ。

3月17日(火) 原稿八枚、『母性愛』/小雨降る日を朝の間に八枚の原稿はスラスラと済んだ/神よ何卒世の多くの女性の生命のために用ひ給への一心である。/萌え初めし庭の小草に見出しけり、こゝ天地のときの動きを。

3月18日(水) 原稿八枚、『棒引した者』/曇、今日は選挙委員会へ度々呼び出されて多忙/小さき島の六百の患者の社会にも、内情甚だ複雑なり、人の世はウルサクなれり、是れ『信』の失せたる結果なりと思ふ。/真折れの橋わたれずアザミ咲く

3月19日(木) 目が痛みて休み/よい日和・・・・・・今日は選挙用紙などの準備を為す、是れで二十二日に選挙すればよろしい/今日は兼て望んで居つた聖書辞典を買ふ事に決心する。/神よ祝福下さいませ。/花に使ふ財布は用たず神の民

3月20日(金) 原稿七枚、『主の聖名によりて』、原稿五枚、『松籟海鼓』/室長会に出席、決算承認外、これ最終なり/今日は聖書大辞典を振替にて注

文したり、拾五円六拾九銭 / 花の春山に汀に人のかけ

3月21日(土) 自治会選挙の準備と手紙とを記す / 小雨降りて何となく春めきて、海面には霞立ち込めて汽笛のひゞき遙かなり / 未だ見ぬ親……を少し読む、矢張りよろし家庭小説は斯くこそありたけれ。 / 春浅し村総会の大興行

週末余白 今週も大変に働かして頂き、原稿も大いに書かして下さいました。感謝 / 自治会改選に当りて多忙であつた、兎に角役員辞退が二十四人もあつて事務が繁かつた / 長い間の憧憬と代価の準備に心を砕いて居つた聖書大辞典を注文して嬉しい

3月22日(日) 自治会役員改選開票のために午後三時半より。 / 春らしい太陽の照る外を眺めもせず、甚だ多忙であつた、惣代 梅水氏、副 笠井氏、主任 北池氏、半田氏、靖木氏、太田垣氏、岡田氏、病世係 中川氏、坂本氏、城市氏、評議 石本氏、上本氏、北山氏、塚本氏、三宅氏、東条氏、大塚氏、田正氏、俺とである

3月23日(月) 原稿七枚、『責任とる者』 / 二里乃宗教、京都市下京区、下鴨松原町三四、泥谷良次郎氏より御恵送下さる / 評議員、副議長に押されてなる。 / みな逃て蜂の巣落ちて来たりけり

3月24日(火) 休養、読書 / 春らしい日である。手紙つくりて、ラヂオをいじつて、読書して終る / 何となく気だるく感じるので、兎に角、休養である。 / 松の島柳一本若葉色

3月25日(水) 原稿七枚、『マ マ』 / 『予言者本間俊平』、泥谷先生より頂く。 / 今日は洋服ブラシを一ヶ求める。卸餅を五つ求める / 草餅に生れ日祝ふ心持ち。

3月26日(木) ラヂオいぢり / 小学校の卒業式に行き、子供こそ嬉しからふと心からよるこんだ、子供になつた時間を保つた。 / 日和もよかつた。心地よい日であつた、神に恵を頂いた。 / 勅語よむ声おごそかに卒業式

3月27日(金) 今日は読書 / 聖書大辞典来る / 好晴にして外は春気分にみなぎる。心地よく仕事する。 / 原稿を書く事がゆるさなくなつた。神の働き

かけを待つて、先ず読書 / 神のこと読む人うれし春日向

3月28日(土) 読書、『聖書大辞典』 / 絶好の日和り、朝、俳句会を為るを見て面白く。 / 聖書大辞典に学ぶ処大いにあり、然れど我が信仰は既に確定、只智的に過ごす。 / 夕、評議員会出席 / ながめよし茶もよき店や卸の餅
週末余白 今週は大した御用もなく休みがちに成りぬ / 夢に大いに恵まれ、我か魂のキリストに信仰に立つ事の確きを我れながら喜ばしき事なり / 夜も昼も神に感謝する事のみなり。

3月29日(日) 集会 / ケンピキにて両耳腫れ悪寒を覚ゆ / 午後四時より室長会に出席し一場の挨拶をなす。 / この宵はアスピリンを服して早寝。 / ちり場に捨てし大根の花さかり

3月30日(月) ケンピキにて少し読書す / 俳句の批評などして面白く過したり / 加奈太《英》の彫本氏へ手紙を書きたり / 春波に港の景の伸ひ縮み

3月31日(火) 明日は開所二十八周年記念日である / 俺は開所の年の五月中旬に入所した、丁度満二十七年にナンナンとするのである。 / 感慨無量、人生は幸か不幸か、俺は人生を有難と思ふ、有難くせねばならぬ、これ人と神との希望である。

(つづく)